

チェンマイ大学での貢献 (100)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では本活動報告が 100 回を迎えるに際し、一つの区切りとして筆者が臨んだ国際交流・国際協力のまとめとしたい。まずは国際交流、協力を臨む基本的姿勢についてあらためて明らかにしておきたい。そもそも相手機関での「貢献」などと厚かましい表現を一連の活動報告に使った事に反省と後悔をしている。なぜなら自分が貢献と想っていても相手機関がどう評価しているかは分からないからであり、筆者は本来「評価はいつも他人がする」と豪語して居るだけに、自らの活動が貢献であるかの如き表現をしている事を恥ずべきと反省、後悔していると言う意味である。タイのチェンマイ大学に招待され、滞在中に多くの機関を訪れる機会もあった。企業の中には、どれぐらいの報酬を貰っているかとの筆者への問いに、「これくらいです」と答えると「このようなところにいけば、もっと多くの報酬を貰えますよ、それではあまりにも・・・」と言う事を聞いたこともある。筆者は次に示すような「志」でタイに来たと言う「信念・信条」を持っている。すなわち

1) 定年退職を終えて、さらに金儲けをする意志はないし、必要も無い。強いて金が必要と言うなら仕事における教育・研究活動費をくれ」といってはばからない。目的は金儲けでは無く、自分が持てるものを提供して相手機関に役立て、役立ちたい、と言うのが基本である。相手機関で最低限生活できる程度であればそれで良い。

2) 公募ならいざ知らず、自ら相手機関にこれだけ欲しいなどと言ったことも、思ったことも全くない。人の世話をする時に、お世話を依頼することはあっても、自分自身の為に依頼することはしないし、したくない。人のためだから依頼するのであり、自分のために無理を聞いて貰う気持ちはさらさら持ち合わせていない。

3) 相手機関を利用して、偉くなりたいとも想わない。偉くなるかどうかはそれこそ他人の評価で決まる。「自らが良くやった」と思っても、それなりの評価がなされなければ、それは自らの努力不足であり、評価する側に不平を言う気持ちはない。不平不満は自分自身の事では無く、あくまでも相手機関、あるいはその組織にとって良くないと考えたときのサジェスション (Suggestion) としての意見としては発言するが、自らを利するための言動は決してしない。貢献したいという立場を考えると、「公」の為に 51%、「私」のために 49%と、常に「公」を優先する事を基本と考えている。それで無くては相手機関に「お役に立てない」と思っている。

4) 相手機関に対し、日の丸を背負った国土としての自覚 (Awareness) とプライド (Pride) を持ち、手本となるべく、ふさわしい行動、挙動に心がける。しかし評価は他人が決めるのであって、自らがするものではない事を熟知・堅持している。さすが日本の大学の教授 (Professor) だと良き手本としての影響を与えることができる程度を維持したい。したがっ

て目的や信念にそぐわない行動は慎み、模範となる事に心がける。

5) 雇用されている以上、立場と身分を考え「” ころ” から相手機関に喜んで貰える」結果につなげたい。

6) 人生における自らのミッション (Mission) を探しつつ、持てる知識や技術を惜しみなく教育、研究を通じて披露、移転し、次世代を担う人材育成に協力したい。

上記が国際交流・協力を臨む、おおよその筆者の基本的姿勢である。では「どの様な方法、行動でそれを実際に表現するか」と言う事が問題になる。タイの大学での10年余の滞在で、どの様に上記の精神を行動で表してきたかを以下の様に回顧する。1年ごとの契約更改のたびに、TOR (Terms of Reference) が確認事項の目安である。すなわち、契約に先立ち、これから先の1年間の契約期間でこのような事をして下さい、「はい承知しました、私のやるべき事を確認しました」と相互に合意した上で契約書に署名する。言うまでも無く事情が変わり、合意したことができなくなる場合もあるが、その時はその時で所属する学科の主任および関係教員と相談、再調整して対応するという事になる。例えば災害などで予定していた負担業務が物理的に実施が不可能になるとか、健康状態の悪化、受講する学生側の不都合、カリキュラム (Curriculum) の変更など多岐に亘るが、補講するとか、別の企画に振り返るなど、適当な対応で処理する。主たる業務は筆者の場合、1) 教育 (Education)、2) 研究 (Research)、3) 社会貢献 (Social service / contribution)、と言う区分になる。合意契約した内容がどの程度達成されたかが、次回の契約更改に反映する。筆者はタイ語が読めないから、契約書に書かれている内容については相手任せで、指定された箇所にくら判的に署名している。タイの大学では外国人教員の場合、基本的に講義は一人では担当できない。実質本人が全てを負担していても、かならず現地タイ教員との分担 (シェア) の形を事務的にはとる。もちろん中間試験や期末試験では試験問題の内容や分量についてはカウンタパート (Counterpart) 教員と相談し、試験監督などは日程などを含めて事務サイドが作成、決定する。評点報告もカウンタパートと話し合い、学科の教員全員が参加する評点報告会で最終的に決定され、その結果が成績証明書 (Transcript) に公的文書 (Official document) として記載される。

肝心なことは何を為たかと言う事実とその内容である。相手機関の要望に沿った対応が出来ていれば満足な評価が得られるが、そうでないと逆の評価となる。しかし評価する側は必ずしも、常に中立的な立場で成果を評価するかは疑問で、気に入らなければいくらやっても評価は成されない。いわゆる人間関係の良否が大きなファクタ (Factor) の一つとなる。その最たる責任者は組織の「長 (Leader)」であり、具体的には学部であれば学部長、大学院であれば研究科長と言う事になる。一般には学部長と研究科長は兼務であるから、実質学部長の権限が最も大きい。しかし学部長が配下の補佐からの告げ口や、報告を信じて、あるいは学部長自身が中立的な判断が成されれば問題は無いが、時には任命権者としての責任を問われはしないかと言う、自分自身の保身に走ると学部の進むべき道は大幅に

偏った側道に入ることになる。簡単に言えば責任を持つ、あるいは責任を取ると言う認識のない人物が要職に就くところとした目の当てられない状況になる。最悪の場合、その人物が要職を終えるまで大学の進展は望めないからである。この活動報告シリーズでも既述したが、要職にある者が自らの保身を優先する体制は大学に限らず、政界ではさらによく知られている。在職中は将来への昇進、昇格のためにミスを犯したくない。どの様な些細なことが命取りになるか分からないと言うことで、積極的に前に進むのではなく控えめに、また昇格・昇級すると、何事も「事なかれ主義になり、自分がそのポストに就いている間は、問題を起こしてくれるな」という消極的な姿勢に転じる。自らが画期的な提案をするわけでも無く、またできないにも拘わらず、他の組織構成員にも意見を言わせない沈鬱な環境を作る。これで大学の進展は数年遅れる。年数は数年であるが、質と量を考慮した中身はその数倍以上にも成る。組織の自浄能力が高く機能すれば良いが、時にはそのようにいくことはない。息切れし、あえぎあえぎ毎日を不愉快に過ごすメンバー（特に教員）が増えるがどうしようもない。結局どの様な体制を作ろうが、その組織に属し、用意されたポジションに座る人間によって組織は良くも成れば、悪くも成る。定年退職後もかつての職場しか知らない者が徒党を組んで寄り集まっても、定年前以上に新しいことにチャレンジする協調性が無ければ意味はない。昔からの同志と思っていた感覚は一瞬にして「犬猿の仲」になる場合も多々ある。「坊主憎ければ袈裟までにくい」が如くコミュニケーションがなくなり、これまでの友人、同志（と想っていた）関係が一瞬で消える。さて、こうした最悪の環境が起こる可能性も覚悟して客員教授としての対応を認識、堅持する必要がある。しかし、敢えて心にもない事を言って媚びを売る必要も無い。講義については最新情報を盛り込み、如何に授業を飽きの来ない雰囲気でも過ごせるかに注力した。多くの資料を参考にするがPPT (Power Point) は全て自分で作成し、授業の終わりに惜しげも無く学生に配布した。その方が自分にとって励みになるからである。何故励みになるかという、何時までも同じ資料を使っていると、聴く側も「もう聞き飽きた、昨年もそうであった」などと言われないうちに、新たに資料を加えて改善を図る努力を自らに課す事になるからである。いわゆる長年中身を変えずに利用している「黄色い」ノートになってはいけない。この事が授業をする側に新たなプレッシャにも成るが、これをプレッシャと捉えるか、新たな挑戦の機会と捉えるかで大きな進展への道が分かれる。この判断が常に前向きにできないと急に気力も衰え、再起は不可能となる。このあたりが残りの人生を生きる秘訣の判断基準になるのではないかと考えている。一旦衰えが見え始めるとまわりの人もあまり近寄らなくなり、孤立、窓際族的な生活スタイルに急激に変化するらしい。

研究活動では、学術的イベント、それも国際学会やシンポジウム、ワーク・ショップにできる限り参加、出席し、論文発表することである。また発表するからには発表だけにとどまらず、フル・ペーパー (Full paper) を必ず用意する事が重要である。イベントの種類、レベル、質に差はあるが、できる限り挑戦、参加して知識 (Knowledge) と人脈 (Human network) の拡張 (Expansion) に努める。せつかく学術的会議に参加するのであるから、

発表だけ為て、そそくさと帰るのではなく、目一杯プログラムを消化し、食欲に情報入手、知人作りに精を出す事が必要である。人脈とは悪いことをするための目的では無く、相手を知り、信頼間を高め、相互理解を進める事で将来の人材育成に協力できる可能性を作る意味がある。何もしていない人が、どうしたことか多額の予算の支給を受けたと言う話は珍しくない。特別なコネ (Connection) で貰ったのではないか? という疑念を持たせないためにも、できるだけ多くのイベントでオリジナルな論文発表をして個人の専門的知名度とともに組織の知名度をも高めることが社会的信用を高めることになるし、後に続く人材育成に道を開く。「常に正面突破(Front breakthrough) を基本とせよ」と言うのが筆者の信条である。つまり小細工をするのではなく、正々堂々と正面から突破する姿勢が必要で、また重要である。筆者は研究論文の発表は年間10回程度を目安に、自分に義務づけている。その理由は、1) まずは仕事の量を示すことが必要であること、2) 量が仕事の質の向上を加速する、3) 発表の機会を多く持つことは、その専門の継続性を維持する意味で重要、かつ必要である。4) また論文発表の機会を多く持つことは、対外的にも著者が属する組織の知名度を上げ、また高める事につながる。言うまでもなく自分自身の知名度を上げるのが第一の目的ではないが、最低限契約更改時の活動実績としての資料の集積という意味でも必要になる。しかし主目的ではない事を明記しておく。

定年退職した者にとって業績を上げる必要は無いし、ましてや金を儲ける必要はさらさら無い。純粋に喜んで貰える貢献になればそれで良い。しかし属する機関 (大学) の知名度を上げることは大学のランキング・アップ (Ranking up) に貢献するから、義務でもある。さらに学術的イベントに参加させる学生にとっても励みにもなり、指導の師の存在が彼らの誇り (Pride) や自慢 (Proud) にもなるほどの効果を得ることができれば、望外の喜びにも成る。教員自らは発表せず、指導している学生に発表させて満足している教員も中にはいる。さらに悪いのは学会などのイベントに参加しない教員もいる事である。その理由は家族サービス優先 (Family service priority) と言う驚きの言い訳である。そうした姿勢を見て、学生はどう思うであろうか。教員は自ら先頭に立ち模範を示すことが義務である。余りにも常識が異なる教員も居ると言うことを記しておく。そうした関係学科、学部ではその分野を選考為たいとする学生数が次第に減少し、分野として成り立たなくなるケースが多い。筆者は前向きに、積極的に、しかも無欲に事に当たるのが貢献であると基本的に想っているが、中にはそうした姿勢を嫌い、嫉妬心やライバル意識を示す者 (教員) もいる。その背景には「あまりやって貰っては困る」と言う立場上のメンツがあるらしい。「自分は学部長だ、いや学部長補佐だ、なのに自分を差し置いて少々やり過ぎだろう」と言う意識のようである。学生、学部、大学のことも眼中には無く、自分にとって困ると言う低いレベルの判断が頭を持ち上げてくると、その大学はそれで終わりである。さらにそれに同調し、学部長までもが部下側に立ち、賛同、支援、結束あるいは団結するようになるとその結果がどうなるかは言うまでもない。大学が凋落の一途を辿るのは語るに及ばない。できる限り機会を見つけて専門が異なっても、いくらかでも関連があれば果敢にチャレン

ジして発表することで新しいジャンル（分野）を開き、そのことが自信を付ける。学祭的知識が必要な現在の状況を考えると自然である。専門（家）にこだわり、従来の専門知識のみで仕事を続けようとしても、それは無理である。最近の技術の発展について行けるからこそ、仕事もできるのであり、そうでないと知識や技術を受ける側には殆ど魅力を感じない。年齢に関係なく、オリジナリティのない仕事が高評価される確率は極めて低い。公の眼に触れず、何時のまにか「えっ、あの研究（あるいはプロジェクト）が、何故あんな高額予算を・・・」と疑念を持たれないだけの社会的認知度を得る事が望ましい。学位論文でも、ある大学では「必ずしも関連の学術誌に3編ほど受理または掲載されている」ことを条件にする大学もあれば、全くそうした事とは関係なく、「大学自身の評価で「学位授与」する大学もある。しかしこの場合はそれぞれの大学の自治による判断であり、国の公的予算の使用と言うものではないから、許されるのであろう。しかし公的予算の支援を受けるにはそれなりの社会的評価に耐える、または耐えたものでないと許されないのが常識であろう。論文は第1著者であるかどうか、評価を左右する。第1著者はその仕事に対し多くの責任を負う。従って学位授与を得ようとする者は常に第1著者である必要がある。あるいはコレスポネンス・オーサー（Corresponding author）でなければその者の成し遂げた仕事（研究）とは見なされない。客員教授の場合はどうなのか微妙である。敢えて第2でも第3でも構わないが、研究の根幹を占める、基本となる、あるいは研究内容の根本となるアイデアを誰が出したかとなると、やはり基本に戻って研究の重要な部分の貢献度で著者名を並べる必要がある。コレスポネンス・オーサー（Correspondence author）の場合は、この事が明らかであれば「誰が基本となる重要な部分を担ったか」は理解される。しかし研究プロジェクトの予算を使つての研究となると、やはりプロジェクト・リーダー（Project leader）にその謝意を表する意味で第1著者に座るべきではないと考えている。しかし何の役割も負担もなく、第1著者に据えるのは却って失礼でもある。微妙な問題でもあるが、後に特許申請などで問題にならない配慮が必要である。多額の予算を獲得しても、参加メンバーが個々に「自分の業績にすると言うのでは最終的に「和」が保てない状況になる。リーダーとして予算申請確保で尽力しても、その後は「はい、ありがとうございます、そこまで結構です」と言うのではやる気も起こらないし、利用されたのではないかと言う不快感が残り、研究の継続実施が困難になる。それなりに謝意を表するのが礼儀であり、研究プロジェクト・チームの「和」を保ち、研究成果の完遂に強力な支えとなる。人々の中にはあまりにも論文発表に、しかも個人名での発表に批判的な見方をする人もいる。あまりにも「これ見よがしに、自分が如何にも活動的に研究をしているかという誇示ではないか」、と言う見方である。筆者はそうした見方を意に解せず、むしろ年輩でもこれぐらい頑張っているのだから、あなた方も頑張ってくれ」と言うメッセージ（Message）になればとの思いである。いわゆる自らの行動で示すということになるだろう。

さて上記は筆者自身の国際交流・協力に対する基本的考え方であるが、果たして世界はどの様に進展変化したかを対比して考えて見る必要がある。残念ながら端的に結論を書くと、

「残念ながら、筆者が思っていた方向で進展」ではなく、繁栄はしたがとんでもない方向に進んでいる国もあれば、戦後のままの国もある。国際化 (Internationalization) が学生向けの国際交流事業のテーマ (Theme) にキーワード (Keyword) として取り上げられたことも度々あるが、筆者の思いからは余りにもかけ離れた国際化に見えて仕方が無い。その顕著な例の一つは、かつての日本は「礼節を重んじる、礼を尽くす」国民性を持って居たが、いまでは残念ながら「国の安全保障よりも金儲け経済を優先」した挙動が先に出てくる、多くの責任有る要職にある人が自らの果たすべき義務や責任を自覚せず、その場限りの対応しかせず、問題の殆どが「事なかれ主義的」に解決されずに、先送り処理されている。また巷に飛び交う情報の多くは「嘘、フェイク (Fake)」であり、「だました者より、だまされる方が悪い」という常識に代わりつつある。筆者が年を取り過ぎたのか、はたまた時代の進みに就いて行けず、置いてけぼりに成ったのか、戸惑いを隠せない。」それでも「いや違う」と必死に頑張ってみるが、2つに一つの選択肢が脳裏をよぎる。すなわち「老兵は去りゆくのみ (Old soldiers only go away)」として諦めてその場を去るか、あるいは「必ず戻ってくるからな (I shall return)」と再起を期して出直すかの2つに一つである。戦後70年余で何が変わったのか、良い方に変わったのか、悪い方に変わったのか、現状を見て自問自答して見る。残念ながら一時的にはジャパン・アズ・ナンバーワン (Japan as No. 1) と世界で技術をリードする地位に立ったこともあるが、今はどうか。「志」を一つに集まって作った組織だと理解して加わったが、実は個人や特定の個人達が利益を得る為にグループを利用していると言う実態もある。国際交流・協力を表で唱い、あるいは強調していても、組織の中では、「俺が、俺が」と「お山の大将」になる事に一生懸命でとても国際的とは言えないレベルである。中身は個人または少数グループの利益集団の集まりと言うのが実態の組織もある。無欲の筆者には余り興味の無い話ではあるが、あまり失礼な利用のされ方をすると寂しい。依頼を受けて応諾しても、その後の扱いは無に等しく、それまでの人間関係はいったい何であったのか、と疑問視せねばならない寂しい結果が待っていることもある。「あまりの失礼な振る舞い」とは筆者のレベルではそうであっても、相手はそれが失礼な行為だとは思っていないところに問題がある。世話をして恨まれるのでは話にならない。しかし、何度かそうした事を経験したせいか、一つの悟りに辿り着いた。すなわち「自分は、彼らとは生きている世界が違う」と。78才から途上国に出向き、不毛の砂漠に樹木を植えて、後々までも、その偉業に地元民から感謝されている日本人も居る。何故、私財を投げ打って、その事業につき込んだのか、そこまでやる「気心」はどこから出てくるのか。答えは簡単である。そのことがその人にとっては、人生の果たすべき課題 (Task) であり、自分に課せられたミッション (Mission) である、と確信しているからである。強固な意志と信条を持つ者にとって、見せかけの同志は要らない。むしろ無駄であり、邪魔なのである。しかし出された仕事の結果は極めてシンプルである。病気を治しに出掛けたが、現地で見いだした答えは井戸を掘り、あるいは河川の水利用をよくする建設工事であったりするから、人々は誤解し、「そんな仕事に高い評価を与えない。何だ井戸を掘ったのか、

あるいは、「何だ樹木を植えたのか」、と言ったレベルしか理解しないからである。しかしその結論を出すまでには長い年月を要している。病気を治すよりは病気にかからない食料、環境を作るのが重要と言う結論になる。途上国では常に、具体的に「如何 (How) にして問題を解決するか」が用意されていなければ成らない。このようにしたら良いという条項をリスト・アップ (List up) することは殆どの誰にでもできる。具体的な対応を提示しなければ解決には成らない。筆者は常に実働部隊の側の人間でありたいと願ってきた。現場を知らずに嘘のデータは信じず、自らの目で確認してから対応する。金が目当ての国際協力は先が見えている。なぜなら金が豊富であれば殆どの人にも可能な課題、案件がいくつもあからである。自らが多くを経験し、得た知識、技術を大いに利用、移転できなければ専門家とは言えない。重要な事は、現地の人への感謝の意のみならず、その事業の完遂が祖国の名誉と信頼を高め、両国間の堅い友好と絆の恩恵を、次世代が知らず知らずのうちに受けていると言うことである。予算取りにあくせくしている低レベルの姿勢を見る度に日本の、日本人のアイデンティティ (Identity) に不快感と疑問を抱くこの頃である。「老兵は死なず」でいつまで生き延びられるか、常に何事が起きてても驚かない覚悟と心境を準備しておきたい。

以下に示すのはタイの大学の上位 30 校のランキングである。この中で上位 1 位、2 位は 3 位との間に圧倒的差があり、苑位置は不動と言われるが 3 位以下は総合的評価も有るが分野により抜きんでたところが評価されてできたランキングと見る人も多く、必ずしも下記の通りではないと異論を唱える人も多い。筆者もこのシリーズで既にかいたと思うが、第 3 位と言っても独立してその位置をキープしているのではなく、4 位との差は極めて僅差で、言うならば 3 位といってもランキングは第 3 位集団と理解するのが良いほどであろう。それほど上下の差は詰まっていると見えよう。少し手を抜けばその順位は途端にひっくり返る程と言われる。政治闘争で内紛に集中している暇は無い筈である。

<タイの大学ランキング：上位 30 位まで>

| | |
|---|---|
| <u>01 位：国立 マヒドン大学 (ナコーンパトム県)</u> | <u>02 位：国立 チュラロンコン大学 (バンコク)</u> |
| <u>03 位：国立 チェンマイ大学 (チェンマイ県)</u> | <u>04 位：国立 カセサート大学 (バンコク)</u> |
| <u>05 位：国立 コーンケン大学 (コーンケン県)</u> | <u>06 位：国立 プリンソブソンクラ大学 (ハートヤイ郡)</u> |
| <u>07 位：国立 スラナリー工科大学 (ナコーンラーチャシーマー県)</u> | <u>08 位：国立 キングモンクット工科大学 トンブリー校 (バンコク)</u> |
| <u>09 位：国立 タマサート大学 (バンコク)</u> | <u>10 位：公立 ナレスアン大学 (ピッサヌローク県)</u> |
| <u>11 位：国立 キングモンクット工科大学 ラッカパン校 (バンコク)</u> | |
| <u>12 位：私立 アジア工科大学 (パトゥムタニー県)</u> | <u>13 位：国立 シーナカリンウィロート大学 (バンコク)</u> |
| <u>14 位：公立 ブラパー大学 (チョンブリー県)</u> | <u>15 位：国立 マハーサーラカム大学 (マハーサーラカム県)</u> |
| <u>16 位：国立 シラパコーン大学 (バンコク)</u> | <u>17 位：国立 メーファールアン大学 (チェンラーイ県)</u> |
| <u>18 位：国立 キングモンクット工科大学 ノースバンコク校 (バンコク)</u> | |
| <u>19 位：私立 ランシット大学 (パトゥムタニー県)</u> | <u>20 位：私立 マハナコーン工科大学 (バンコク)</u> |

- 21位：私立 アサンブション大学 (バンコク) 22位：公立 スアンドウシット大学 (バンコク)
23位：公立 スワンスナンター ラーチャパット大学 (バンコク)
24位：私立 バンコク大学 (バンコク) 25位：国立 ラムカムヘン大学 (バンコク)
26位：国立 メージュール大学 (チェンマイ県) 27位：私立 スィーパトウム大学 (バンコク)
28位：国立 ナショナルインスティテュート ディベロップメント アドミニストレーション大学 (バンコク)
29位：私立 ラジャマンガラ工科大学 タンヤブリー校 (パトウムタニー県)
30位：国立 ウボンラーチャターニー大学 (ウボンラーチャターニー県)

出典：Wikipedia

<https://kyujin.careerlink.asia/thailand/%E3%82%B3%E3%83%A9%E3%83%A0/thai-university-ranking>

* こちらに掲載しているタイの大学ランキングは RANKING WEB OF UNIVERSITIES 内にある [Thailand\(World Rank\)](#) (外部リンク) を参考にしています。